慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中國民俗學研究の近況
Sub Title	
Author	直江, 廣治(Naoe, Hiroharu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.114(250)- 118(254)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

此道を秋の燃ゆる樣な紅葉の崖下を筆者も幾度通つたことか。文明の恩惠は此無人の境に田畑を開き人烟山々に滿ち、はては輯安から數時間にして飛機は奉天安東に至り、梅輯線は一夜にして新京に達するに至つた。そして秘められた高句麗の歷史と文化とが漸くにして世に紹介されようとした矢先、敗戰のいたましい夢によつて再び總ては千六百年の昔に還つて行つた。學問に國境はなくとも私達の憧憬が高句麗の古文化を求めることは十年二十年にはありさうもない。ましてや三十八度の緯度線は完全に高句麗を隔離してしまつた。平壤から馬背に十日を要した關野博士の頃さへもなつかしい。滿洲から新義州までハイヤーによつて鴨綠江岸を長驅した昭和十年の頃は、東亞の考古學界も惠まれた華やかな時であつた。高句麗人の天降說を天孫降臨の古傳に比較して滿洲の要人に苦い顏をされたり、高句麗祭に日鮮滿の男女が相共に和樂したあの頃を考へて、高句麗人の自由な幸福な世界が昔の其國に來たかに考へたのも、今は全く夢となり空想と成つてしまつた。

——二二・一〇・一——

中國民俗學研究の近況

直江廣治

中國民俗學研究の展開については別に詳細なる報告を用意してゐるので、ここでは昭和十六年六月私が北京に赴任してから、二十一年六月歸國するまで足掛け六年間の主として彼の地に於ける民俗學研究の動向の大略を紹介するに止めたいと思ふ。

民國初年以來中國に於ける新文化運動の中心であり、同時に又民俗學運動の母胎ともなつた嘗ての國立北京大學も、事變の勃發によつて教授學生の大分部が南方に移り、當時存在してゐるのは同名ではあるが、全く內容の一變した北京大學であつた。其他北京の著名な大學であつた國立清華大學や中法大學、或ひは天津の國立南開大學も南方に去つてゐたし、昭和十六年末大東亞戰爭の勃發を機に、アメリカのハーバード大學の分校であつて燕京大學も遂に閉鎖されるに至つた。北京に止つた大學としては北京大學、師範大學、輔仁大學、中國大學の四つがあつたが、教授の顏觸れには大きな變動があつた。又各種の集會は日本憲兵隊の極度な監視下に置かれ、從つて民俗學會とは限らず全ての中國側の學會活動は長い冬眠狀態に入つてゐた。かうした狀態は北京だけに限らず、所謂當時の和平地區に共通した現象であつた。民俗學研究の第二の中心地として、顧頡剛、容肇祖、鍾敬文氏等の指導の下に「民俗週刊」を百二十

三期まで繼續して出したあの歴史的な廣東の國立中山大學も、全學園こぞつて抗日戰線地區に移つてしまつてゐた。

又かねてその名前に親しんでゐた著名な民俗學者顧頡剛氏や、日本の雜誌民俗學に「中國民俗學運動的昨日和今日」(昭和八年一月五卷一號)といふ論文を寄稿してゐた妻子匡氏、或ひは日本にも來朝し、中國文學研究會のために新宿の白十字で、「中國民間文學の蒐集と探求」といふ講演をしたり、「中國民譚的型式」を民俗學(昭和八年十一月、五卷十一號)に寄せてゐた中國民俗學のホープ鍾敬文氏等の姿も和平地區には見出せなかつた。

而も重慶地區との連絡は嚴しく絶たれ、彼の地に於ける民俗學研究の活動狀況は知る術がない狀態であつた。併し私の研究には幸な事であつたが、なほ數名の民俗學者が北京に留つてくれてゐた。民國以來絶えず啓蒙的な論說を書いて民俗學に携はる人々を指導し、又柳田國男先生の「遠野物語」や佐々木喜善氏の「聽耳草紙」を紹介したりして日本民俗學とも關係の深い周作人氏。又周氏と共にかつて北京大學内に設立された「歌謠研究會」の主任として活躍して來た沈兼士氏。沈氏は私の奉職した輔仁大學の文學院長であつた關係から、絶えず接觸する機會に惠まれてゐたのであるがその沈氏も昭和十九年夏には北京から姿を隱してしまつた。

其他顧頡剛氏と共に歌謠集刊の編輯をやつてゐた常惠氏や、民間信仰方面の專門家で、「髮鬚爪」や「中國古代旅行之研究」等の好著を出してゐる江紹原氏も北大教授で殘つてゐた。

併しこれ等民俗學に關係のある人達の手によつて中國側に民俗學會が結成されることは遂になかつた。

ただ一度接收後の燕京大學の中に作られた中日共同の華北綜合調査研究所の小部門として、昭和十八年に「習俗委員會」なるものが作られ、周作人氏が委員長となり、その下に常惠、江紹原氏それに京都の東方文化研究所に長い間留學してゐた傅芸子氏等が集つたが、遂に何等の業績をも示さずに終つた。

日本軍の占領下にあつて、何等自主性を持ち得ない情勢下に置かれてゐた中國側の學者に活潑な活動を期待することは、この時期に於ては無理な注文であつたと言はねばならない。

一方北京にゐる日本人の同好者の間には、橋川時雄氏を中心に「民風會」といふ民俗研究のグループが出來てゐたが、昭和十六年九月北京の神祇講座に來燕された折口信夫博士を圍んで「民俗學の分類」についての講演を聽いた頃から活潑な動きを示すやうになり、やがて周作人氏を顧問に推して、昭和十七年春に東方民俗研究會の名の下に發展的に再發足した。

發會式には周氏の挨拶があり、中國側の民俗學者と緊密な提携の下に研究を進める意圖であつたが、當時の情勢下に於ては中國側の學者の積極的な協力を求めることは困難があり、結局日本人だけの調査研究に終つてしまつた。この會は毎月一回研究會を開いて、採集報告や研究報告を行ふ外、民俗資料展覽會を開催したりした。又東方民俗叢書の刊行を企圖し、「北京地名考」、「白雲觀の道教」(新民印書館)の二册を世に送つた。

北京にあつた滿鐵北支經濟調査所では昭和十四年以來、主任杉之原舜一氏の下に北支慣行調査班なるものが設けられ、天津事務所と連絡を取つて華北農村の實態調査が數年にわたつて繼續されてゐ

た。調査は危險と不便を冒して華北の諸村落に入り、家族構成、村落構成、土地制度等村落社會の殆ど全般にわたつて綿密な聞き書きを行ひ、その調査報告書は尨大な量に達してゐる。これは同じく滿鐵上海事務所の華中農村の實態調査報告書と共に世界に誇るに足る輝かしい學的成果であると私は思つてゐるが、この實態調査報告書の中には民俗學的方面から見て貴重なデータが數多く含まれてゐる。尙この「北支慣行調査資料」を基礎として、平野義太郎氏の「北支村落の基礎要素としての宗族及び村廟」、戒能通孝氏の「支那土地法慣行序說—北支農村に於ける土地所有權と其の具體的性格—」(共に東洋研究所の支那農村慣行調査報告書第一輯—昭和十八年十月—)及び平野氏の「北支の村落社會」(昭和十九年八月)、最近では仁井田陞氏の「華北農村に於ける家族分裂の實態」(東洋文化研究第四號、昭和二十二年六月)等の優れた論文が其後現れてゐる事を附記して置く。

又民國二十七年十一月(昭和十三年)に發足した北京大學附設中國農村經濟研究所でも、主として日人研究員の手によつて農村實態調査が行はれ、研究資料や研究報告が十數册出てゐる。主として農業經濟の方面からの研究であるが、この中には民俗學が利用すべき多くの資料が含まれてゐる。例へば「山東省惠民縣農村調査報告」(研究資料第一號、昭和十四年)、「河北省晉縣視察報告」(研究資料第二號、昭和十四年)「華北に於ける現存諸部落の發生」(資料第五號、昭和十六年)、「山東の一集市鎭の社會的構造」(資料第八號、昭和十七年)、「山東省膠濟沿線地方農村の一研究」(資料第九號、昭和十七年)「北支那村落に於ける耕地分配」(報告長編第二號、昭和十九年)等の報告書が特に擧げられた。

これ等日本人の手による實態調査の資料は今後復活すべき中國人による民俗學研究に一つの大きな刺戟を與へるであらう。

次に外國人による民俗學研究の狀態に移るとこれは仲々活潑であつた。先づ昭和十三年に北京の中法大學が南方に去つてからその跡に民國三十年十一月(昭和十六年)創設された Centre franco-chinois d'études sinologiques 中法漢學研究所はフランス大使館から資金が出てゐるため經濟的に豐かで、資料を盛んに蒐集する一方、中國人の優秀な研究員を使つて研究を行はせてゐた。この研究は所謂フランス流のシノロジイをやる所であつたが、特に民俗學的方面を重視し、大使館參事館をやつてゐたデュボスク氏が熱心にこの方面に力を入れて、民國三十一年七月(昭和十七年)には、「民間新年神像圖畫展覽會」を開催した。これは民間信仰に關係のある紙碼(紙に印刷した神像)を殆ど中國全地域にわたつて集めて並べたもので、例へば門神(門の扉の兩側に貼る神像)にしても、並べられた數多くの神像を見ることによつて門神信仰の變遷を自然と跡付けることが出來るやうになつてゐた。門神の他に財神、竈神、百份等の豐富な民間の神々の像が並べられ、參考資料まで出してある周到さであつた。日本の外交官にデュボスク氏の片鱗でも眞似る人があつたらと其時思つたことであつた。

この研究所は其後、「明代版畫展」や「十七八世紀に於ける佛蘭西の中國研究資料展」等を開いて活潑な動きを見せてゐたが、民國三十三年(昭和十九年)に至つて「漢學」第一輯を出すに至つた。この中には著者自身はフォクロリストではないが、民俗學的方面か

ら注意すべき論文が二つ載つてゐる。

楊堃氏の力作「竈神考」がその一つである。楊氏はフランスに留學してグラネ氏の下で勉强して來た人で、既に「家族社會學」の著書もあり、主として社會學的方面から民間信仰を分析してゐる。もう一つは孫楷第氏の「傀儡戲考原」であり、これは先に輔仁學誌十一卷第一、二期合刊本に發表した「近代戲曲原出宋傀儡戲影戲考」なる論文の補編をなすもので、近代戲曲の起源を民間に求めようとする新しい試みである。次にカトリック系の北京輔仁大學では、日本の大學院に相當する文科研究所で「民俗學方法論」や「民族學」の講座が設けられ專門のフォクロリストの養成につとめる一方、大學附屬の人類學博物館があつて各地の豐富な民俗資料を陳列してゐた。又館長獨逸人 Matthias Eder 博士の下に數名の研究員、助手がゐて戰爭中も着實な研究を續けてゐた。

かつて北京大學研究院にゐて、「北平廟宇通檢」や、「北平金石目」を編纂した許道齡氏や、輔大出身の純粹のフォクロリストで將來を期待される趙衞邦氏もここの研究員である。

歐文の "Folklore Studies" 「民俗學誌」が刊行されたのもこの博物館であり、戰爭中を通じて最も活潑な學問的活動を續けたのは恐らくこの人類學博物館であらう。

'Folklore Studies' の創刊は一九四二年（昭和十七年）で、これはウイン大學のあの著名な Gulielmo Schmidt 博士に獻ぜられた記念號である。四六倍判で一〇九頁、圖版、挿圖多く最初にシュミット博士の寫眞を掲げラテン語で獻辭が書かれ、先づ以て豪華な印刷である。內容の主なるものを紹介すると、シロコゴロフ、「中國に於ける民族學研究」　趙衞邦、「扶乩の起源とその發達」　ジョセフ、ティール、「替身（かたしろ）焚き」　陳祥春、「驅邪符に就いて」　趙衞邦、「中國近代民俗學研究概況上」　カール、ライツ「幣帛、みてぐら、御幣」　マッティアス、エーダー「雲南貴州省に於ける佛教傳說」　エーダー、「日本と獨逸の動物民譚」　英文以外の歐文報告に對しては英文のアブストラクトを附してゐる。

第二卷は一九四三年（昭和十八年）に刊行され、二一五頁で內容は

楊嗣昌著、趙衞邦譯註、「武陵競渡略」　カール、ライツ、「神道祭祀の儀式」　ド・プレシューエ、「祈雨」　エーダー「北京房店前面の裝飾」　趙衞邦、「中國近代民俗學研究概況下」　マルチン、「一九四二年北京街門の春聯」　ウァルター、ハイシッヒ、「昭烏達盟蒙古人の定位及文化變遷」　タスジャン「分類學と因子分析」　エーダー、「唐代の瓦棺」

この卷からは英文と中文兩方のアブストラクトを附し、英文で最近の東亞民俗學關係文獻の紹介が附載されてゐる。

第三卷は一九四四年（昭和十九年）に二册出て、第一册は、

趙衞邦、「廣東に於ける中秋節の遊戲」　趙衞邦、秋歌—河北省定縣に於ける村芝居—」　ウァルター、ハイシッヒ、「キイリイエ族に於けるシャーマンと降神術者」　ボール、セェリュイ、「山西大同縣南の婚俗—婚俗と關係ある方言の記錄—」等の論文を含んでゐる。

第二册は日本民俗學特輯號として、柳田國男先生の古稀のお祝ひに獻ぜられた。卷頭にラテン語の獻辭と共に柳田先生の寫眞が掲げられ一五五頁中七六頁を日本民俗學の紹介に割いてゐる。これは昭

和十七年に、中央公論社から國民學術協會編として「學術の日本」第一篇が刊行されたが、その中に含まれてゐる。日本民俗學―柳田國男」をエーデル博士が序文を副へて獨逸語に飜譯したものである。日本民俗學がまとまつた形で世界の學界に紹介されたのはこれが初めてであらう。この第二冊にはこの他次の二論文が載つてゐる。

ボール、セエリュイ、「山西大同縣南の婚俗（續）」

カール、ライツ「延喜式所載鎭花祭の祭品」

第四卷は一九四五年私の歸る頃には印刷所に廻つてゐたから昨年中に出てゐる筈である。この 'Folklore Studies' にはフォクロアの論文以外にエスノロジイや時にはアーキオロジイのものまでも載せられてゐるが、それは掲載すべき雜誌の數の少なかつたあの戰時中の情勢下にあつては許されねばならないであらう。戰爭中の外國人の研究については知られるところが少いのでここではフォクロア以外の論文も掲げて置いた。

尙戰爭中を通じて所謂和平地區に於て、北京以外に中國人の手によつて民俗學界の作られたことは聞かなかつたし、又日本人側にも北京以外には組織的な研究會は生れなかつたやうである。ただ滿洲では昭和十七年までに「滿洲民俗圖錄第一輯」（國立中央博物館）、「滿洲の宗教」、「滿洲民俗考」、「滿洲娘々考」、「滿洲農村民謠集」、「滿洲の街村信仰」（共に滿洲事情案內所刊）等が斷片的に出て、滿洲事情案內所がこの方面では力を入れてゐたが、新京建國大學の大間知篤三氏を中心に滿洲民俗同好會が作られ、會報を數回出してゐたが大した活躍は示さなかつた。大間知氏の「滿洲民族雜記」はエスノロジイの方になるが優れた研究であつた。

臺灣での研究に若干觸れると、臺北帝大の金關丈夫博士が中心になり、昭和十六年七月以來月刊の「民俗臺灣」を刊行し、本島人の良き協力者を得て着實な歩みを續けて來た。所謂本島人の多くは服建廣東方面と深い關係にあるところから、この雜誌に收められた豐富な民俗資料は、中國民俗學研究にとつて一つの大きな收穫であると言ふことが出來やう。

要するにこの戰爭中を通じて所謂和平地區に於ける中國側の組織的な民俗調査、研究は停頓の狀態にあり、この期間においてはむしろ日本人及び外國人の手による中國民俗學研究が活潑であつた。その方法なり收穫なりが、將來復活すべき中國人の手による中國民俗學研究に如何なる刺戟を與へ、如何なる價値評價を受けるかは、中國民俗學史の上から興味ある問題であらう。

終戰と共に沈兼士氏は教育部の平津地區接收委員として、亦輔仁大學文學院長として歸つて來たし、顧頡剛氏も今は名を改めた北平に戻つてゐる。又かつて文學革命を指導した胡適氏も北大校長に就任したし、孫楷第氏からも中法大學で講義をするようになつた旨便りがあつた。北京、清華、燕京等の諸大學、天津の南開大學、廣東の中山大學もそれ〴〵昔の場所に復校しつつあるやうだ。木枯吹き荒ぶ灰色の時代は過ぎ去つて、我々には暖い春の息吹が感じられようとしてゐる。併し國共の相克はいつ果てるとも知らず、民俗學會の復活は勿論、民俗學者の調査も現在の中國ではまだ〴〵困難な狀態であらう。鍾敬文氏や婁子匡氏の活躍振りが我々の耳に傳へられるのはいつの日のことであらう。（九月二十八日記）